「対話と実行」座談会　グループ・団体との座談会
第７回「四万十川すみずみツーリズム連絡会
～四万十川流域すみずみの取り組みとｸﾞﾘｰﾝﾂｰﾘｽﾞﾑによるﾈｯﾄﾜｰｸ～」
（H23.2.2）の概要

司会：　ただいまから、四万十川すみずみツーリズム連絡会と尾﨑知事との「対話と実行」座談会を開会いたします。

それでは、尾﨑知事からご挨拶と県政方針等についてお話を申し上げます。

1．知事のあいさつ

皆さん、こんにちは。大変お忙しい中、この座談会にご参加を賜りましてありがとうございます。

今日は、四万十川すみずみツーリズム連絡会の皆様方は、いわゆるグリーンツーリズムの最先端をいって、しかもネットワークを組んでやっておられることで、レベルの高取り組みをしていらっしゃり、さらには地域おこしに対しても非常に先進的な取り組みをしておられると伺っております。それぞれの皆様方の成功体験やご苦労といったことをお伺いして、今後の県政の運営に生かさせていただきたいと考えております。

【基本政策について】

今、盛んに取り組みを進めているのが、経済の振興の問題、そして教育の改革、日本一の健康長寿県構想の推進、これが県政の３本柱です。これに加えて、それぞれを支えていくための必要不可欠なインフラ整備の推進や、さらには南海地震対策といったものを進めてきているところです。

この第１の経済の振興につきましては､お手元の産業振興計画のパンフレットのとおり、今、実行２年目で、進めているところです。ひとつの大きなコンセンプトは地産外商ですが、前段の問題として、まず地産地消を徹底し、それに加えて地産外商を進めています。

高知県は、この５年間で人口が３万人減りました。結果として経済規模も合せて縮んでいくという現象が続いてきています。これは、高齢者の方々の数が、２０代から４０代の子どもを産む年代の方の数よりも圧倒的に多いことに伴う、ある意味自然減少と言わざるを得ない側面があります。これから、あと１０年、１５年くらいは、こういう減少ペースというのは続いていくのではないかと予想されています。

そういう中で、県内の足下の市場頼みであっては、残念ながらうまくいかないので、外から外貨を稼いで来て、県内市場が縮んでいく分を補っていくという試みが必要だと思うわけです。

地元で作ったものを外で売って外貨を稼ぐということもひとつですし、地域に外から人に来てもらって地元でお金を使ってもらうことも地産外商だと考えております。高知県のように高齢化、人口減少が進んでいる県では、このことを余計進めていかなければならないと思うわけです。

例えば、観光振興の取り組みとしては、龍馬伝にあわせて、「土佐・龍馬であい博」を開催しました。また、外商活動という点では、東京のアンテナショップ「まるごと高知」で売り込みを図る。店頭で売るという事も目的のひとつですが、東京のデパートやスーパーに外商活動をかけて契約に結びつけ、東京で物が売れるような取り組みのバックアップをするといったことを営々と進めてまいりました。

【産業振興計画の改定について】

産業振興計画は、今年の４月から実行の３年目になります。毎年度、時々の状況にあわせて改定し、またバージョンアップをしていこうと考えています。今年改定するポイントとして、３つお話をさせていただきたいと思います。

第１には、地域地域での拠点ビジネスというものを発展させるような施策をとっていきたいと考えています。地域アクションプランとしていろんな取り組みをさせていただいてきた中で、かなりうまくいったものやこれからまだまだというもの、もう一段上のレベルに上げていくことが出来るんじゃないかと思われるものがあります。

また、さらには、こうち型集落営農の取り組みなど、いくつかモデル地域を設定して、県内６ヶ所くらい実施してまいりました。これは、集落協定を結び、売り物になる作物を多品種植えていき、年に何回も収穫を得て、現金収入が得られる農村をつくっていこうという取り組みです。さらに、農産物の加工でありますとか、グリーンツーリズムをあわせてやっていくなど、いろんな産業を組み合わせて集落全体として、ビジネス展開していき収入が得られる、ゆえに若い人が残れる。そういう集落づくりを目指していくような取り組みを大いにバックアップする施策を強化していきたいと考えています。

第２には、土佐・龍馬であい博の後継として、「志国高知　龍馬ふるさと博」という観光イベントをもう１年、実施していきたいと考えています。龍馬であい博は、非常にある意味うまくいきました。今日の開催地である梼原町も１０万人の目標にあと一歩でありましたが、本当に素晴らしいお取り組みだったと思います。地域の皆様方が頑張られて、集客を図ろうとされ、結果として新しく観光地になったというところが、安芸や梼原をはじめ、県内いくつも出てきているのではないかと思います。

経済効果の当初予想が２１０億円ちょっとでありましたのが、５３５億円まで拡大いたしました。やはり、多くの皆さんが官民協働で頑張られた結果だと思います。

大河ドラマが終わった翌年の反動減対策、これをしっかりと講じていくことが大事だと考えています。大河ドラマが終わった翌年、その前の年よりも落ち込むというのが通例で

あります。それを防ぐためにも、大河ドラマが終わった翌年に、もう１回観光イベントを打っていきたいと考えています。

坂本龍馬がひとつのメイン、ターゲットということになります。坂本龍馬の人気は、そう簡単には衰えないんじゃないかと。龍馬伝をみて高知に来たいと思った人の１０分の１くらいしか実際には高知に来てないんじゃないかという分析もあり、そういう分析も参考にして、引き続きそういう潜在的な顧客に高知県へ来ていただくようにするためのイベントを打っていこうと考えているところです。

この龍馬ふるさと博は､龍馬であい博をさらにバージョンアップし､龍馬だけではない、その他のいろんな歴史の資源というものをもっと生かして、より地域地域に、観光客に来てもらおうというのがあります。

もうひとつは、歴史だけではなく、花や食、自然体験といったものをもっと前面に打ち出し､もう一段地域のすみずみまで来ていただくために誘導していきたいと考えています。

逆に言うと、毎年、何とか博ということをやるわけにはいかないので、このふるさと博でＰＲは一旦終わり、ふるさと博が終わった段階では、それぞれの地域で、一定県外に向けての発信力をもった観光地となっていけるようにしていく。ある意味、この１年間は大きく成長していくためのゆりかごのような時期でもあるとも考えているところです。

そして、改定のポイントのもうひとつは、地産外商。外商は大分進んだところはありますが、残念ながら地産がうまくいっていないというところがあります。例えば、アンテナショップでは非常に高知産のショウガを使った商品が売れていますが、加工しているのは県外という品物がたくさんあります。残念ながら高知県では、産業集積が小さいから、県内で加工工程が完結しないという経済構造の弱点があります。ものづくりは地産地消であって、それで作ったものを外へ持って行って外商をしていく。そうすることで県内にお金ができるだけ落ちていくといった取り組みを、マッチングさせる「ものづくりの地産地消センター」をつくって強化すること｡さらにマッチングしやすくするための技術支援とか、いろんな投資に対する支援といったものを組み合わせて一連のものづくりの地産地消政策を大幅に強化していきたいと考えておるところです。

こういうかたちで、来年度は産業振興計画をバージョンアップして、より地域の産業おこしにつながっていくような取り組みを進めたいと考えています。

【医療、福祉、鳥獣対策について】

福祉の面では、日本一の健康長寿県構想を第２版に改訂予定をしております。

まず､医療の点で申し上げれば､今年の３月中旬から､ドクターヘリを一機増やします。２機で運行させることとなり、今まで対応できなかったところの救急医療の体制をもう一段強化して、対応できるようにしていきたいと考えています。

もうひとつは、高知医療再生機構です。短期的にできるだけ早く医師を呼び込んでくる

システム。県内の大学とも協力させていただく予定ですが、医師確保を全力で進めて、スピード感をもって取り組みを進めていきたいと考えております。

また、あったかふれあいセンターの取り組みを始めとした高知型福祉の取り組みも、もう一段強化したいと思っております。あったかふれあいセンターは今、県内で３９ヶ所できており、多くの方々に集っていただいています。集いということが今、大きな機能になっていますが、その機能をもう一歩進めて、例えば、訪問をして、早期に支援が必要な方も来ていただけるようなシステムづくりや、さらには地域の方々の生活といったことをバックアップする拠点として使っていくというようなことができるようにならないか。もう一段、地域の暮らしを支えるものとしての機能強化をすることができないかといった地域福祉活動計画を今年つくる予定になっておりますが、それにあわせて、バージョンアップを図れないか検討していきたいと考えておるところです。

最後にひとつ。シカやイノシシが増えています。前四万十市長さんに「中山間の暮らしというのは、野獣との闘いだ。」と教えていただいた言葉を忘れられません。最初、私は東京から帰ってきたばかりでピンときていませんでしたが、それが本当の話だと実感しています。シカを撃って、捕ってとしていますけれども、残念ながらまだ増えています。シカ対策を抜本強化するよう、例えば、専任のシカを撃つチームをつくっていくといった取り組みを考えているところです。

以上、主に中山間関係として、県政としてこういう方向で進めていこうとしているところでございます。どうぞよろしくお願いをいたします。

＝　市町村の出席者、県出席者の紹介のあと、四万十川すみずみツーリズム連絡協議会の参加者の自己紹介がありました。＝

２．四万十川すみずみツーリズム連絡会の概要

会長：　連絡会のメンバーは、本当にいろいろな取り組みをしている人たちで、流域も５市町村あり、現在、３４のグループが入っております。

この連絡会は、平成１８年に県のリーダーシップで農家民宿さんたちに声をかけて、１０軒そこそこの農家民宿と、これから始めようとする人たちの集まりからスタートしました。

最初は、研修の場として、先輩の施設の取り組みを教えていただいたり、５市町村の各施設をまわりながら、食事や提供している体験メニューを実際自分たちが体験してみるといった情報交換を、年に３回程度開催してきました。平成２１年に自主的な取り組みにシフトしていこうということで、まず、会長・副会長をたてて、役員会を開催しつつ、本会を開催してきました。それまでの組織では上流から西土佐までの流域でしたが、その時に旧中村市も入っていただいて、ネットワークの拡

大もして、新しく立ち上げた民宿さんにも声がけして、その時点で３０施設くらいに増えてきました。

その後も、それぞれの課題、今抱えている問題点を出し合うというかたちで会を進めてきたところ、皆さんの施設が、流域の奥の奥、本流から入ったところで、お客さんから、「道、わからん」「ナビも消えてしまう」といった声があるという話があり、この時、案内板が欲しいとなりました。それで、共通の案内板づくりというのが、私たちの中心課題になって少し動き出してきています。

その頃、同時に、四万十川流域が国の重要文化的景観の選定も受けました。これは、連絡会の会員の暮らしが、四万十川と一緒に暮らしてきた、自然と共に生きてきた私達の文化そのものが、この取り組んでいるグリーンツーズムそのものではないかということを再発見したように思います。

１年前には、大正の中津川の重要文化的景観の取り組みの一環である、ひなまつり街道を研修視察させていただき、身近なところで自分達の文化を上手に自然の中に溶け込ませるように発信しているのに感心したことです。組織のそれぞれが重要文化的景観の中に暮らしている事。また、それを育て受け継いできているのも自分達であるということを大事にしたいなと思います。

先ほどの案内板の話ですが、共通の案内板をどういうものにするかという話し合いに随分時間をかけてきています。この会の方向性、皆の思いというところを出してこないと、かたちだけの共通案内板になるんじゃないかと思いました。そこで、掘り下げるために、昨年１年間かけて、ワークショップを開催し、講師の方や地域のデザイナーの方をお呼びして３回開催してきました。

そのワークショップでこの会の現状や課題、この会に期待するものは何なのかといった会員の皆さんの気持ちを引き出しつつ、統一案内板という目に見えたかたちにもしていくようにしました。

案内板の作成には、費用が結構かかるので、高知ＮＰＯ地域社会づくりファンドに申請して、２分の１の補助をいただいています。３月の始めには会員の手元に案内板がわたる予定なので、近々流域で見られることになると思います。すごく嬉しいです。私達の３４施設は、毛細血管のように、枝の先っちょにそれぞれの施設があります。地図の中に落としてみた時も本当に散らばっているんです。そういう話の中から、「四万十川すみずみツーリズム連絡会」という名称も生まれてきて、名前の変更も出てきました。

それと、このワークショップの中から食と体験と、それを広報するという３つの部会も立ち上がり、ワークショップと共に会を重ねてきました。現在この流域には５０以上の体験メニューがあって、食も上流から下流まで、全く違う文化をもっているんだということもわかってきたので、そういう食や体験メニューを今後整理し

て、広報部会ではＰＲしていくかたちにまとめていきたいという話になっています。

そのためにも、やはり財源が必要なので、昨年の１１月にトヨタ財団の地域社会プログラムにも応募しております。

これからの現在の取り組み状況ですが、まず案内板を各自が立てること。あと、お客さんが来なかったら何もならないので、外から人が来ていただけるようにＰＲするため、広報部会も活躍しようとしています。

今後の課題としては、日本のグリーンツーリズムも、１０年以上経ってきて、現在、グリーンツーリズムの転換期というお話をいただいたことがありますが、私たちの取り組みもレベルアップして、質を向上させ、より集客につなげていくということがひとつあります。せっかくの四万十川というネームバリューを生かして、元気な流域のグリーンツーリズムのネットワークも生かして、さらに四万十川に来てくれる方を増やすために、まず、パンフレットやリーフレットを作っていきたいと考えています。

今年の龍馬ふるさと博にも大変期待しています。高速道路もさらに伸びていくので、そういう効果をいかに流域すみずみまで取り込むかということが私たちの課題です。

事務局の四万十川財団が、事務的な手続きをしてくださっているので、今後もそういう役目を引き続きよろしくお願いしたいと思っております。

最後に、私たちそれぞれが地域のすみずみで頑張っている小さな施設の集まりですが、私たちの取り組みがその地域になくてはならない存在になっていきたいと思って頑張っていますので、是非、これからも応援とご指導をよろしくお願いします。

知事：　どうもありがとうございました。あの看板、いいですね。黄色で。あったかい感じですね。

会長：　いろいろシミュレーションして、背景が川でも、山でも、雪でも、目立ち過ぎなくて目立つように。しかも、大体、車で来られるお客様が多いので、そういうことを意識してデザインさせていただきました。作るだけだったらすぐできるけど、作ったあとが大事やからということで、時間をかけて作らせていただきました。

知事：　またデザインが統一で、一種の統一のブランドになりますもんね。

会長：　そうですね。一斉に並ぶということも、何か大きなインパクトになるんじゃないかと思って、上手に生かしていきたいと思っております。

知事：　観光客の皆さんを受け入れていくにあたって、ネットワークを組んだからこそ良くなったのは、どういうことがあったでしょうか。

観光も最終的には、客商売になってくるわけですから、お客さんの注文にできるだけいつも応えられるようにしないといけない。同じ価格で、同じサービスレベルを提供しないといけない。いわゆる４定条件（定時、定量、定価格、定品質）といったりしますけど、そういうものを満たしていかないといけない。

他県の知事さんと意見交換していて、こういう自然体験というものは、なかなかこの条件を満たすことが難しいので、観光商品としてＰＲができない、結果、広がりにくいところがあるという話を伺ったことがあるんですが、ネットワークづくりというのは、ひとつの突破する道なのかなと思いながら、非常に興味深くお話を伺いました。

会長：　ネットワークの利点は、例えば、次の民宿を仲間内で紹介することができることです。そのためには私たちも他の民宿や地域を訪ねて行って、どういう施設かよく知っておかなければ紹介できないということがあります。それがまず一番大きい点ではないかと思います。上流から下流まであり、バラエティーに富んでいて、全く違うところがあるので、少しパッケージ化していきたいと考えています。一泊だけではなく、上流から下流までいろんなメニューも楽しんでいただけるような商品化も考えつつあります。

知事：　商品ができたら、教えてください。

ふるさと博には、自然体験といったものも非常に重視して入れていますし、食や花もテーマで入れています。高知県のすみずみまで足を伸ばしていただきたい、パビリオンの先に行っていただきたいというのがひとつであるのと同時に、もうひとつは、歴史とともに、やはり花とか自然とか食というのがまさに高知県の観光の強みそのものであり、そういうところもＰＲしたいという思いもあってです。

おっしゃるようなパッケージができたら、素敵でしょうね。

会長：　はい。食でいうと、例えば冬のお鍋ツアーとか、冬の売り込み方もひとつのテーマなので、普通の観光ではなくグリーンツーリズムの観光として、流域全体での商品開発も考えていきたいなと思っています。

知事:　現実に皆さんのところで､渡って泊まっていかれている方はいらっしゃいますか。

途中でカヌー乗って行くといったこともするんでしょうか。

会長：　「かみこや」に泊まって、翌朝カヌー体験に行くからと、朝早く出発される方とかいますね。

知事：　例えば、予約が複数入って、収容人数を超えた場合は、ネットワークの皆さん同士で紹介し合うということもやっておられるんですか。

Ａさん：　「森のコテージ」は定員が５名ですが、地域には「清いろの里」という集会施設を利用した１０名定員の施設があり、大人数の場合はそこへ予約が入ります。そこで３０人規模とか７０人規模の宴会の場合に、近場で泊まりたいからというので、周りにある４軒の民宿で分宿するということは、過去に何度もやっております。

Ｂさん：　私のところは３名（３軒）でやっていて、２５名くらいまで泊まれます。
　それより多くなる時は、集会所を利用して、４０名くらいを引き受ける時はあります。

知事：　他に、お客さんを受け入れるうえで、例えば、食材を融通するといったことなどありますか。

会長：　近隣のところではそういうことがあるみたいですけど、上流、下流まで行くとちょっと紹介するのには距離があります。

Ｃさん：　うちは一日ひと組なので、連休や夏休みは何件もお断りしなきゃいけないケースが出てきます。その時に、夏はどこでもいっぱいですが、皆さんにお願いして、ご紹介したりしています。

知事：　昔、高知県の観光は南国土佐のイメージ、いわゆる大リゾート地として売っていたわけですよね。ただ、そのあと外貨が自由化されて、リゾートに行くんだったら、ハワイやフィジーとか、日本内であったら沖縄に行くようになったりもしてきている。そういう中で観光の目指すべき方向、戦略的な方向というのは変えないといけない時期が来ている。やはり、自然の中で、いろんな滞在型・体験型の観光というのが高知県の目指していく道だと思うんです。ただ、滞在型・体験型観光というのは、逆にいうと小規模分散型であるがゆえに、旅行商品にするには弱点を持っているというのもあって、その弱点をネットワークになることで補っておられるというところは、高知県が目指していく観光の方向性を大きく切り拓いてくれるものだと

思うんです。

パッケージにして観光で売り込んでいこうとされているというお話についてですが、その売り込みをされる時の、例えば、商品づくりとか、営業活動、広報、ＰＲというものはどういうかたちで協働してやっていかれているんですか。

会長：　それがやはり一番大きな課題になっています。県内のある旅行会社が、そういう商品をつくって、東京のアンテナショップなどにも置いてくださっています。

いくつかそれで集客できているところもあるかもしれないですが、まだまだ弱くて。私たち各施設では、そういう力が全く欠けていて、素晴らしい素材をもった人たちばかりなので、プロがそれを上手にコーディネートして売り出して下されば、必ず集客につながるのになというのが、越えなければならない課題だと感じています。

知事：　流域観光圏協議会というのをつくっているところがあって、例えば、四万十は四万十市全体でつくって、修学旅行の受け入れに非常に力を発揮していて、さらに修学旅行から超えたことをやっていこうと、今、議論されています。

仁淀川の流域も、この前、流域観光圏協議会を立ち上げたばかりです。仁淀川を観光資源としてこれから生かしていく、例えば、屋形船なんか流してみようという構想が出たりもしてきています。

それから、中芸も、魚梁瀬森林鉄道を観光資源として生かせないかという議論が出てきたり、実際に、旅行会社が商品にしてくれて、１０００人くらいのお客さんが来られたそうです。そういう取り組みも進められたりしている。

やはりそういう広域での観光を取り扱って、例えば、旅行業免許も持っていて、それでＰＲするような、そういうことが必要なんでしょうね。ですので、流域での観光を一緒に取り扱って商品化し、それをＰＲ、営業活動をするという取り組みを来年もう一段強化しようと思っています。今、いきなり四万十川の皆さんと、ということにはならないかもしれませんが、そういう取り組みは段々強化していきます。

３．施設の活動報告

連絡会会員の４施設の方から、活動の報告をいただき、知事がコメント・質問を行いました。

＜民宿　野彩＞

Ｄさん：　「野彩」の体験メニューとしては、私は野鳥が大好きなので、来ていただいたお客様に野鳥のガイドをしたり、バードウォッチングをして楽しんでもらったりしています。

また、近くには、久保谷森林セラピーロードがあるので、せせらぎや風のささやきを感じながら、自然の中でゆっくりと過ごしたい方や都会の生活でストレスを感じている方に来ていただき、歩きながら心を癒してもらっております。

「野彩」は、開業してまだ１年４ヶ月です。開業のきっかけは４年前に久保谷森林セラピーロードが認定されたことや、四万十街道ひな祭のイベントを通じて、松原にたくさんのお客様が来ていただくようになり、「泊まってゆっくりしたいけど松原には宿がない」という声があり、たまたま私が小さいロッヂをもっていたものですから、やってみようかなということで始めました。

何もわからない私が民宿を始めたものですから、初めは、料理、お客様への対応、体験メニューなども自己流でやり、お客さんが、「野鳥に会えてよかった」「セラピーロードは気持ちよかった」と言ってくださると、あまりお金にはならないけど、自分が楽しいからいいか、くらいに考えておりました。

ある時、お声をかけていただいて経営の勉強に参加させていただき、その時、今までの自分が目的もなく、その場限りの粗末な経営だったと気付かされました。

経営していくうえでは、自分自身の目的を持つことが大事だと言われ、５年後の自分がどうなっているかを静止画像で見える目的をつくりなさい。そして、民宿、つまりセラピーロード、グリーンツーリズムは、その目的のための手段だと勉強しました。そこで、私は野鳥が大好きで、テレビでモンゴルの大草原をイヌワシが飛んでいるシーンを見て、「一度行ってみたい」と思い、それを自分の目的にしました。そのための費用を民宿「野彩」で作り出すことにしたのです。

さて、収入を得るためには、お客様をどうやって増やすのか。経営の勉強を続けるうち、私の民宿の他の宿ではマネのできない特徴や能力は、私は野鳥が大好きで、野鳥の知識があり、ガイドができることだと気が付き、野鳥に興味がある人をターゲットにしようと考えています。

現在、梼原町では、「梼原びとを元気にする補助金事業」というのがありますが、それをいただいて日本野鳥の会の広報誌の２３年１月号に「野彩」の広告を載せました。それについては、東京の野鳥の会の本部に行き、直接担当者に会い、野鳥に対する考え方や広告の一流のデザイン、お客様への対応などを勉強させていただき、「野彩」の広告を東京から発信しました。

また、銀座、群馬県の旅館のご主人に会い、経営についてお話を聞かせていただきましたが、私が一番心に残った経営にとって大切なこととは、お二人ともそれぞれ自分の宿に対してしっかりとしたコンセプトを持っていて、決して軸をゆるがさない経営をするということです。そのコンセプトに合ったお客様であれば、道路が悪かろうが遠かろうが来てくれます。とはいえ、道路は良いに越したことはありません。松原までは非常に道が悪くて困っておりますので、どうぞよろし

くお願いいたします。

梼原や松原も、ここでしか出会えない魅力のあるものを見つけ出し、作り出し、提供すれば、遠くても行ってみたいと思うお客様は来てくださると思います。そのために何が大切か。関わっている住民の１人１人が目的をもち、勉強し続けることが出来るか。そんな人になれるかどうか。それがこれからの私自身の問題であり、地域おこしの課題でもあると思います。

行政の力はもちろん必要ですが、イベントの手助けなどばかりでなく、地域には本当に素晴らしい能力を持った人はたくさんいるので、住民に考える力がつくにはどうすればいいのか、そうなるには何にお金をかけることが一番必要か、考えていただきたい。きちっとした経営の勉強をすることが本当の意味での地域おこしにつながるのではないかと補助金事業で思いました。

知事：　本当におっしゃるとおりですね。素晴らしいことだと思います。

経営の勉強をされる時に、どういうことを参考にされましたか。やはりネットワークの皆さん同士との交流なんかも役にたたれましたか。

Ｄさん：　１年くらい前からですけど、このグリーンツーリズムとはまた関係なく、松原の５名で勉強しようということで集まりました。私は何十年も主婦だったので、本当に経営なんか頭になかったんですが、一つ一つ教えていただき、勉強していくうちに、いかにフォーカスするかということもわかってまいりました。

知事：　やはり人材育成関係といった事業をしっかり行政が前をきってやっていくようにすることは、大事なことでしょうね。

Ｄさん：　初めは難しくして、何でこんな勉強をしないといけないかと思いましたけど、やはり「知っている」でものごとを進めるか「知らない」で進めるかでは大きな違いがあります。いろんな会で会長がおっしゃることや、この座談会で知事がおっしゃることも、だんだん勉強していくとわかってくる。しないと、わからない人間で終わるところでした。勉強し続けるということを教えてくださったことは非常に大事だと思うし、矢野町長さんが後押ししてくださって、本当ありがたいと思っています。

矢野町長：　四万十川は、やはり源流から端までが、四季折々の中で皆様方がしっかりと、その地域地域で歴史と文化を守り育て築いているんだなとつくづく感じました。

皆さん方がネットワークして、それをもう一歩踏み込んで、町外の皆様方に提

供するということは大きな財産です。文化的景観というのは、人と自然が作り出したもので、人がひいたら、私は終わりになると思っていますから、これを永久に続けていくためにはやはり、それぞれの地域で守って、育てて、築いていただいた皆さん方に、さらに取り組んでいただきたいという思いがいたしております。

知事：　Ｄさんの目指しておられるところまでは、カバーできてないとは思うんですが、産業振興計画でも人材育成の部分を２２年度から強化をしています。ひとつは、アドバイザーを派遣させていただく、もうひとつは、直接のいろんな人材育成塾みたいなこともやり始めたりしていますので、ご利用いただきたいと思います。

また、県立大学の改革をしていく中で社会科学系の学部をつくったり、それにあわせて社会人教育をもっと充実したりということを、目指そうとしているところです。より、いろんな人材の層に厚く対応できるように、大学改革を含めてやっていきたいと思っております。

＜四万十源流センター　せいらんの里＞

Ｅさん：　「せいらんの里」は、自然豊かで歴史や文化が多く残っている船戸地区にあります。名前は、せいらんという珍しい川海苔がとれることからつけました。経営についてですが、四万十川源流点や不入山（いらずやま）の登山に来られる方が多く、私たちも地域活性につながることはできないかと、平成１６年、同好会せいらんを結成し、１１月には四万十源流ウォーキングを開催しました。去年の１１月に第７回をむかえ、町外から１７０名の参加があり、そのうちの１２０名の方がリピーターです。平成１７年４月より旧森林センターを借り受け、体験型の宿泊施設「せいらんの里」をオープンし、平成１８年１月からは本格的に移動販売を始めました。

移動販売を始めたきっかけは、ゴールデンウィークや夏休み以外は、宿泊客が少なく、施設の維持費を確保することと、留守番を兼ねてお惣菜を作って売りに行ったのが始まりでした。お惣菜を近くの方に持って行ったところ、いつも持ってきて欲しいとか私の家にも持ってきて、と声をかけてもらいました。

この活動を地域支援企画員の方が、地域のためになることとヒントをくださり、移動販売の内容を考えるようになりました。民生委員さんにも協力していただき、高齢者の方の家に１軒１軒必要なものを伺いに行き、保健所の方にも宅配の様子を見ていただき、勉強会を開きました。

宅配サービスの現状ですが、人員体制は５名、販売エリアは５地区、５０名程度の方が利用してくださいます。販売物品は、お惣菜やその他日用雑貨、自分で料理できる人もいるので、お出汁や食材を持って行きます。車のところに来られ

る方は数人で待っていてくれます。いつも来てくれる人が来ていないと、仲間同士で気を付け合っているようです。体の不自由な方には、戸口まで持って行きます。メニューは、７～９種類作っていろんな食材が食べられるようにお勧めしています。商品選びは楽しみにされているので、ゆっくり選んでもらうように気をつけております。

材料の仕入は、船戸地区でしています。特に、野菜は生産者の方に安く分けてもらったり、お惣菜を買ってくれる方が、自分の家で出来たものを分けてくれたりしているので、これが、安価でできる理由になると思っています。

それと、その野菜で１人ではなかなか作りにくいお惣菜を作ったり、食べたいものを作って買ってもらうという、どちらも役に立っている喜びがあったから今まで移動販売を続けてこられたのだと思います。

独り暮らしの方にとって会話はとても楽しみだと思うのですが、販売してる私たちも楽しみで、とても励まされています。移動販売は、新しいメニューの開発の場になったりするんですが、評判の良いものは宿泊されたお客さんのメニューの中に取り入れます。

今後の課題としては、この活動を理解してくれて共に働いてくれる従業員を育てることが一番で、あとは、具合の悪い方などがいらした時の対応が、少しわからないこととかがあるので、それをどのように連携していくかということです。

これからの取り組みとしては、宿泊施設もたくさんの人に利用していただけるようにしていきたいと思いますし、それがまた移動販売を続けられるための収入になるので、四万十川源流点、不入山を県の方と一緒に売り込んでいけたらなと思っております。

知事：　冒頭で、あったかふれあいセンターの取り組みの話をさせていただきましたが、給食の宅配サービスといったことができるようにならないかと、今、模索していて、そういう意味でノウハウなんか勉強させてもらいたいなと思います。

もうひとつ、よく、共同収穫・共同出荷の仕組みとかあって、例えば、黒潮町とか熱心にやっておられると思うんですが、地域の方々の移動手段の確保なんかのバックアップをもっとできるようにならないのかなと今、考えたりもしています。

県で研究していて厳しいなと思うのは、経営がなかなかうまくいかない、移動販売とか、もしくは共同集荷というやり方をやったとしても、どうしても赤字になってしまいます。例えば、補助金を入れて続けるとか、ボランティアで献身的にやっていただいて、やっと維持しているというようなケースがあるんですよね。何とか、より一般化、自立できるようにやっていけないかと思うんです。そういう中で、「せいらんの里」の皆様は、自立的にやっておられ、コストを抑えることなんかもおっ

しゃいましたけど、どうやって黒字にしていくのか、そこらへんを教えていただけたらと思いますが。

Ｅさん：　移動販売では、黒字になることはないです。

やはり、宿泊のほうで得た、決して利益が出るような集客もないんですけど、そちらの分をまわすことで何となく全てを見てまわる、運営ができるという状態になっております。

知事：　やはり、そういう仕組み、全体としてまわっていくような仕組みづくりというのが必要なんですよね。

これから、地域地域の社会福祉協議会が中心となって、地域での福祉のあり方を考えていこうということを、特に２３年度、やりたいと思っております。日本一の健康長寿県構想の中の高知型福祉の取り組みを強化するにあたって、地域福祉活動計画を各市町村でつくっていただこうということを考えているんです。

県でまず、地域福祉支援計画を策定中で、これは各市町村がつくられる、独自の福祉の取り組みをバックアップするというものです。各市町村のほうでは、市町村社協さんをバックアップする体制をつくっていって、その市町村社協さんが中心となっていただいて、その地域での福祉をどうやっていくべきかということについて計画をつくっていってもらう。地区の見守りは、こういうかたちでやっていこうとか、そのために、民生委員・児童委員さんやヘルスメイトの皆さんとも連携して、この地区はこんなふうにやっていこうといった具体的な計画をこれからつくっていこうとしているところです。

そういうことで、来年度は社会福祉協議会と、地域のいろんな福祉を担っておられる皆さんとの連携強化を進めていきたいと思っています。

＜四万十・黒尊の小さな宿　森のコテージ＞

Ａさん：　「森のコテージ」は平成１８年８月１８日に、もともとあった家を利用してオープンしました。「１日ひと組５名様までの小さな宿」というキャッチコピーでＰＲしました。ＰＲ方法として、始めは手作りのパンフレットをあちこちのお店などに置いていただきましたが、限界を感じ、ホームページを悪戦苦闘の末開設しました。アクセス数や予約が徐々に増えていく中で、ホームページの威力というものを痛切に実感しました。

開業から丸４年が過ぎ、利用者数は年々増加傾向で、開業１年目は３２２名。昨年は４９９名でした。リピート率は、組数で計算すると、２年目は１０％、３年目は２３％、昨年は３２％で、連泊数は平均２．３日です。今年の夏休みの予

約は既に満室の状態で、そのリピート率は９０％となっています。

地域別のランキングでは、１位高知県、２位大阪府、３位東京都となっています。お料理の提供が可能になったのは１９年からで、それまでは、農家レストラン「しゃえんじり」様のご協力をいただき、ケータリング方式でやっていました。

「森のコテージ」で、有料体験というメニューは、あえて販売はしておらず、その理由のひとつとして、私どもは「森のコテージ」で過ごしていただくことが体験であると考えているからです。もうひとつの理由は、近隣に体験施設がたくさんありますので、そちらのほうにご案内ができるからです。

それから、私どもの地域では、地域活性化を目的とした４つの団体がございます。１つ目に、「しまんと黒尊むら」というのがあります。四万十川の支流の中で最も透明度の高い黒尊川が流れており、平成の名水百選にも選定されております。その源流には、足摺宇和海国立公園に指定されているブナの原生林、国有林があります。そんな中、地域の活性化や自然との共生を考える住民組織「しまんと黒尊むら」ができており、地域住民の意識啓発の事業が進んでおります。

２つ目に、口屋内地域では、地域のおばちゃん達の農家レストラン「しゃえんじり」ができ、たくさんのお客様が来ています。また、民宿へのケータリングでもご協力いただいており、なくてはならない存在となっております。

３つ目に、奥屋内下地域には２５戸の家があって、その地域の集会施設を利用した宿泊施設「清いろの里」というのができました。２つの五右衛門風呂も新設して、１０名の宿泊が可能となっています。お料理担当は地域のお母さん達です。

４つ目に、「四万十くろそん宿街道」です。黒尊川流域には、「清いろの里」以外に、４軒の個人民宿があります。受け入れ人数がとても少ないため、定数以上の申し込みがあった場合は、協力し合う目的でチームをつくったものです。

私は、地域の団体と情報交換をしながら相互間の協力体制を、体制づくりをしていくことがとても重要ではないかと考えております。

今までやってきて課題としては、一番困るのが、お葬式の時です。１年も前から予約が入っていたりしますと、お客様を断ることができず、地域に対して不義理をしてしまうという心苦しいところがあります。

２番目に、自分が病気になった時のお客様のお料理について、３番目として、私どもでは柚子を栽培していますが、農繁期（８月、１１月）と予約の集中期が重なることです。ちなみに、１年間を通してのお断り合計件数は、一昨年は 300 件、昨年は 280 件くらいありました。

それから、連泊時のお料理メニューについても、４～５泊のお客様の時には、（車で）往復２時間ぐらい仕入れにかかることもあるので、その時間的ロスをとても課題として感じております。

今後の展開については、飽きられないホームページを作成しなければいけないなと考えています。今年はベースからリニューアルしたいという目標をもっています。

私の宿は、のんびりゆっくりできる宿ということを目標にしています。「何も無い田舎だけど、やはり心休まるね」とか、「あの味はやっぱり森コテに行かないと味わえないよね」と言われるような宿にしたいと考えています。

それから、黒尊川とか四万十川とか市町村のつながりで連帯感を強化して、県の方々の地域に密着したご指導とか、ホームページをつくるとか細かなご支援がいただけたらいいなと思います。

統一感のある地域づくりということで、それぞれの独自性を保ちながら地域全体の発展を目指し、「高知の桃源郷」とよばれたいと思っています。

都会の多くの方は、田舎が大好きで、「遠いとか道が狭いとかは、大きな問題ではない」と、毎年東京から車で来ていただくご家族がいます。既に１８回も宿泊していただいた大阪のお客様もいらっしゃいます。あるがままの生活をし、その生活の中にお客様をお迎えしている「森のコテージ」でございます。

私は、お客様から教わりました。田舎ということに自信と誇りを持つことを。たかが田舎、されど田舎だと思っております。

知事：　たかが田舎、されど田舎ですよね。そう思います。

宿泊数やリピーター率も高く、平均宿泊数が２．３日とは驚きました。高知県全体の平均よりはるかに大きい。すごいと思いました。

お葬式とか病気になられた時は本当に大変ですね。こういう点からしても、くろそん宿街道の皆さんでお互い助け合ったりということをされていて、やはりネットワーク化というのは重要なんですね。

パンフレット方式からホームページへ切り替えたら反応はやはり大きいですか。

Ａさん：　もう全然違います。皆さんにお薦めしたいです。予約状況もホームページで確認できるようにしているので、キャンセルが入ったらすぐまた更新しています。

見慣れているお客様は、空いている日と言ってきてくださいますので、とても助かっています。

知事：　ホームページ作りとかそういうような地域に密着した支援をというお話をしていましたけど、よく考えてみたいと思います。

しまんと黒尊むらの皆さん、非常に活発に住民活動をやっておられますよね。皆さん方が、黒尊川という素晴らしい資源を生かして、もっと教育というか哲学的な

ところへも発展されて、いろんな取り組みを進めておられるんだろうと思います。具体的には、例えばどういうところで連携してやっておられるんでしょうか。

Ｆさん:　黒尊むらの場合､流域の住民皆が黒尊むらの村人という位置付けになっていて、役員の中には、それぞれの地区の区長さんが入っておりますので、地域の状況というのはすみずみまでわかる状況の中にあります。

外に出て行くよりも、やはり地域に来てもらい、交流人口を増やすことによって地域を元気にしていこうという動きを自分たちでつくっていく中で、民宿の人達が活発に動いてくれていることがひとつの財産であり、私たちも「お昼はしゃえんじりに来てね」という感じで、ゆるやかに横につながりながら、黒尊川は私たちの大事な川なんだよというところをゆるがさないで取り組んでいます。

知事：　特にレストランをされていると、地元の食材を使って作られ、例えば、ケータリングをしたりといったかたちでの助け合いも行なわれたりされているのですか。

Ｆさん：　はい。農家民宿を立ち上げたけど、どうしても食事は自分の所では作れないというところには､「しゃえんじり」からお弁当にして持って行くからということで、今もやっているところもあります。この前､「清いろの里」で会議という時に、たまたまお葬式が入って､「じゃあ、料理はうちでしようか、会場はそっちで貸してね」といったつながれる関係ができているというところがあります。

知事：　３年前に伺った時に、いろんな商品を開発してやろうと取り組みをされているのをお聞きしましたが､それで外へいろいろ売ったりするようなことというのは､「山間屋」の皆さんがやっていらっしゃるのですね？泊めて、レストランで食べてもらって、商品開発してと、流域一体となっての取り組みを進めておられて、本当素晴らしいと思います。

Ｇさん:　一緒になってやれるのが一番なんですが､なれる部分となれない部分があって、なれる部分でのつながりを中間で担えたらと思い「山間屋」をやっています。外販部隊というものをつくって、西土佐地域のものを（愛媛県）松山市に持って行って売ったりしています。

黒尊川流域の天然の山茶が、今、すごい人気が出ていて、今年はその山茶を集中して摘んでくれないかと、地域の人にお願いしているところです。それをまた体験メニューにできないかと地域の人と話し合い、地域の産品にしていけないかなと思っています。そういう部分の担い手というか、それが四万十の山間屋かな

と自分で思っています。

Ｆさん：　かつて、「国民休暇県　高知」という高知県のキャッチフレーズが、皆さん「働け働けで中流になりましょう」という時代の時に「休みましょう」というのはあまり好きじゃなかったんですが、今思えば、それってものすごく大事なことだし、それを言った当時の知事さんはここまで見据えていたのかなと、思います。

Ａさんから、高知の桃源郷という言葉が出たんですが、やはり、その地域その地域の大事なものというので、ゆっくり休んでくださいというのが、グリーンツーリズムの大事なところだと思うんです。

そういう思いで横につながっていったら、「森のコテージ」に泊まった人が、お昼は「しゃえんじり」で食べて、次、どこかに行くという感じで、いつの間にか連携というのがとれていたり、あるいは、「いちょうの樹」さんから夜、「明日、お店開いてる？うちのお客さん、行くそうよ」という連絡をもらったり、そんなことがいつの間にかできているのがここの連絡会のいいところで、自分たちで結果的にパッケージになっているような取り組みができたらいいと思っています。

知事：　国民休暇県構想は（前々知事の）中内知事の時につくり、「国民休暇県　高知」は今の十河副知事が考えたそうです。残念ながら、その後、観光政策としてそのまま継承していくというかたちになっていなかったところもありましたが、「土佐二十四万石博」あたりから、そのあと、「花・人・土佐であい博」、さらには、「土佐・龍馬であい博」、そして今度、「志国高知　龍馬ふるさと博」ということになりますが、観光振興というものを高知県の産業の柱のひとつにして、腹をくくってそこに進めていこうとしているところです。さらに、龍馬であい博を実際にやってみて、これがどれだけ経済効果をもたらすか。高知県は観光でいけるじゃないかと非常に自信も持たせてもらったようなところもあると思っているところです。

ただ、いろんなブームがあろうがなかろうが関係なく、高知県の強みとしてやっていけるものとして、やはりこの滞在型・体験型観光、特に農家民泊とか、皆さんがやられている観光があるんだろうと思います。

＜四万十カヌーとキャンプの里　かわらっこ＞

Ｈさん：　「かわらっこ」はカヌーとキャンプの施設なんですけど、県などいろいろなところから補助をもらって他にも事業を始めています。

「かわらっこ」というのは施設名で、大川筋地域振興組合として、上流から９つの地区が集まって、運営しています。

平成１２年に、市からの委託事業として利用料金制で「かわらっこ」を運営し

て、２年くらいかけて、市の補助無しで経営をするかたちに変えました。さらに、平成１８年に指定管理となっています。

今のところ、正組合員約２２０人で正社員が２名、ふるさと雇用で２名います。７～９月の多客期にあわせて、４月から６ヶ月雇用として数名雇っています。

修学旅行の受け入れの場合は、カヌー業者などに協力してもらって、スタッフを借りたり船を借りたりしながら、協力してやっています。

主な業務内容としては、まずカヌーです。多い時には、１ツアーで８０人以上のツアーになったりします。次に、キャンプ場です。夏場はほぼ満杯になります。

あと、地域の人と密着してやっていくということで、直販所もして、組合員の生産製造している特産品や野菜等を販売しています。

農家民宿のあっ旋もやっていますが、農家民泊は受け入れ（人数）が少ないので、修学旅行とかになると、キャパの問題がでてきます。文科省の方針で、修学旅行は体験型の修学旅行になってきていますが、東京とかに営業に行った時にキャパの問題を指摘されました。

あとは、やはり交通の面です。関西や関東方面からの修学旅行になると３００人とかの単位になり、空港のキャパが問題になっています。移動時間も問題です。そこを除けば、幡多エリアは、海と山と川が三拍子揃って、他には全国どこにもなく、そこは大々的に売っていけるところなので、行政の方が力を入れていただければいいと思います。

他には、川漁体験や支流遊びなどの体験メニューを今、考えて増やしていっているところです。体験メニューづくりは、今からのグリーンツーリズムに大変必要になってくると思います。この前、県の補助をもらって、徳島であったグリーンツーリズムの育成会に参加することができました。その時に思ったのは、やはり個人でそういう講習会にはなかなか行けないということです。値段もかなり高く、補助や行政の力がないと行けない部分も出てきます。大変意義のあるもので、時間も朝８時から夜中の１時半くらいまでの講習を受けてきました。徳島の勝浦町のおばちゃんたちも参加されていましたが、そこは年配の方５０名くらいが体験のインストラクターをやっていて、地区でものすごく頑張っているところです。そこで感じたのが、今から民宿や体験メニューを増やしていくのであれば、やはり地元のそういう年代の意識レベルの改革が大事だと思っています。

九州のほうでも、成功しているところがあると聞きました。そういう面に力を入れてもらえるとすごくいいかなという気はしています。

他に、四万十川の流域の観光資源を連携させて、回遊滞在型観光ができる仕組みを構築するために、平成１９年に「四万十また旅プロジェクト」という経済産業省の補助事業で始まったプロジェクトをしています。四万十川流域は、回遊の

滞在型の観光じゃないと、やはり移動とかにかかっていろんなところにまわれなくなるし、通過されるだけになってしまうので、滞在型観光がすごく大事です。

今はネットワークといえばインターネットなどでやっていますけど、この連絡会に関しては、それをしつつ人と人で情報をまわしていくというのが大事だと思っています。良い景色を観ても、一度行けば次はなかなか行かないと思いますが、もう１回戻って来るとすれば、「人」だと思います。リピーターが多いというのは、多分人柄にひかれて、ああ、また会いたいなというような感じで帰って来るんだと思います。

うちも、キャンプに関しては年間約３０００人、カヌーは５０００人、修学旅行が約１０００人となっていますが、夏場はほとんどリピーターの方で、毎年子どもが成長していくのが見られます。

また、中山間直接支払い制度による事業もやっていますが、去年の９月に集落協定の認可を受けました。地域の人の協力を得ながら草を刈ったり野焼きをしたり、あと、トラクターで耕すようになっています。これは、耕作放棄地の問題を解消するため、地域活性化のため、あとは一次産業とつなげるために、耕作放棄地をなくして、農産物を作り、物販のほうでも何かできないかということでやり始めています。それに少し連動しているのが、四万十川流域に昔からある特産物で仏手柑（ぶしゅかん）がありますが、「ぶしゅかんプロジェクト」といって、農工商連携で、一次産業と観光を結びつけていこうと、去年から研究してきました。今年から実際商品開発をして売り出していこうというところまできています。

次に、四万十市からモデルハウスの委託管理を依頼されて、県内産の木材とか使った県内の建築家による家作りを提供することを始めました。一応、（モデルハウスに）宿泊はできる体制になっています。７年間はこれをやっていこうということで、１年間少し様子をみながら、市の補助も受けながら、モデルハウスとして、県内産の四万十のヒノキとか、四万十市に在住している建築家の人たちをもうちょっと売り出して、職を提供したいということで始めています。

知事：　本当に総合商社みたいですね。

ご存知かと思いますけど、県も一定以上の比率で県産材を使ってもらったら最大１００万円まで補助が出ますという制度をやっていますので、是非それを使っていただきたいと思います。

さっきリピーターというのは最終的に人だと思うとおっしゃいましたが、本当にそうなんですよね。素晴らしい景色は１回観たら、観たことあるで終わるといいますもんね。キャンプはほとんどリピーターの方ですごいですね。

講習会の件ですが、こういう人材育成事業というのは、だんだん拡充をしていき

たいと思っています。例えば、我々も体験型観光の日本のカリスマみたいな人を呼んで、アドバイスをしてもらう事業といったこともやったりもしています。

いずれにせよ、皆さんが勉強される場をいろいろ構えていくような、そういうメニューを揃えていく取り組みは本当に力を入れなければと、思っています。

それとキャパについては、受け入れる側（宿泊）のキャパの問題もあるでしょうが、そこは分宿の手もあるのかもしれませんので、いわゆる航空機の機材が小さい、シートが確保できないという話ですよね。

Ｈさん：　そうですね。いっぺんに移動ができないと困るとか、分散するとかいう話もあるんですけど、今、保護者の方が、同じ場所じゃないとだめということが多いので。うちのカヌーでも同じところからやってくださいと言われるんですよ。

うちは、基本的に上流から下流に「かわらっこ」まで下ってきて、午後のコースは、「かわらっこ」から下流に行くんです。そうしないと、船の運搬ができないので、できれば午前・午後、大体８０人・８０人とかいうかたちで修学旅行とかはやっていますが、場所も同じじゃないといけないという学校も、少ないですがあります。

知事：　飛行機の件は、だんだん航空会社も協力してくださるようになって、トリプルセブンといった大きい機種が来始めたりもしてるんですけど、まだまだ、路線によって課題がありますからね。修学旅行特有の、特に滞在型に対する対応というのはもう一段考えないといけないところはあるでしょうね。

４．意見交換

参加者と知事のフリーの意見交換を行いました。

Ｉさん：　私が民宿を始めたのは、地元のものをお客さんに食べてもらいたい、鰻とか鮎とか、本物を食べてもらいたいということからです。

体験のほうも、そのあとで始めたんですけども、お客さんが自分でとって自分でバーベキューして食べる。とりたてを食べるということを本当に喜んでもらっています。

知事：　やはり、リピーターの方、多いでしょう。年齢層はどうですか。

Ｉさん：　「また来ます」って帰って、今年もリピーターの方が来てくれます。

小さいお子さん、家族連れの方から高齢者の方まで様々です。

Ｃさん：　知事のお話しの中で、観光振興ということで、非常に大きく取り上げておられますが、連絡会の皆さんの話を聞いていただくと、四万十川流域は素晴らしい取り組みをしており、それはグリーンツーリズムの真髄だと思うわけです。観光と重複するところもあるんですけど、やはりグリーンツーリズムというのは、地域のいろんな人づくりであったり、地域づくりであったり、第一次産業の振興につながったりと、違う面があるわけです。行政は、そこが一緒、観光というひとくくりになってしまって、非常に勘違いされることがあるんです。

皆さん、もちろん営利は追求していますが、それ以上に生き甲斐の問題であったり、地域づくりであったりといったことで非常に頑張っておられるわけです。

そういった時点でまた違う行政の支援はあるだろうといつも思ってるんですね。

外国に行ってグリーンツーリズムの発祥地を見てきましたけど、やはり、農村と都市は対等な立場で交流をすすめ、地域の山村の経済、また景観が、それによってしっかり守られている。それがグリーンツーリズムの真髄だということを勉強してきました。

そういった面で、観光だけではないというさびわけを県としてもしていただければ嬉しいです。各町村でもお願いしていますが、なかなか町村は職員も限られており、さびわけして対応できないことがあります。以前県は非常に熱心にグリーンツーリズムを進めておりましたけど、今は少し見えない部分があります。

知事：　最近、グリーンツーリズムの取り組み、見えませんか。

Ｃさん：　地域支援企画員だとか、四万十川財団とかがやっていただいているんですけど、県全体で、中山間地域の生き残りの策として、このグリーンツーリズムをどう位置付けるかということが見えないんです。

知事：　やはり、高知県の場合、地域の暮らしというのは、一次産業が軸だと思うんです。ただ、その一次産業の暮らしというものから派生する産業というのをあわせて伸ばしていくことでもって、地域の全体としての生活を支えていけるようにしていくということが非常に重要だと思っています。

一次産業から派生する産業の典型的なものが、いわゆる加工して売っていくということ。より付加価値をつけて高いお金で売っていける。例えば、馬路村がそれで成功されて、西土佐も非常に盛んにやっておられて、そういう取り組みをしておられるところもあったりすると思うんです。

もうひとつは、その一次産業の現場、いろんな体験、そういうものそのものを観光資源にしていく。さらには、一次産業と関係なく、そもそも自然そのものを売り

にしての観光というのを進められている部分もあると思うんです。修学旅行の誘致にしても、いわゆる農山漁村の暮らしというものを子供たちに体験させるべく、観光資源として生かしたりする。

やはり、一次産業の暮らしがドンとあって、それに関連する産業、加工であったり、それに関連する観光であったりというものを伸ばしていくという取り組みに位置付けて、今、展開をしようとしているところです。産業振興計画でも、そういう産業間の連携というのをうまくやっているところが、県全体として、残念ながら今までちょっと弱かったんじゃないかということで、関連する産業で食品加工とか、それから観光というのを伸ばしていこうとしているところです。

その地域地域で一次産業の取り組みを伸ばしてきたことを、さらにその関連の加工とか観光とかというかたちで、それぞれ地域、農村で一定の拠点ビジネスみたいなものを展開していくことをバックアップしていこうという取り組みをもう一段強化することができないかということを今、考えているところで、それがまず、経済的な系統の話としては第一だと思っているところです。

もうひとつ、人づくりにつながるとか、さらに言えば、生き甲斐になっているという話もあると思います。もっといえば福祉とか、社会的な見守りとか、まさに移動販売の仕組みなんかも福祉そのものに、もうなっておられるんだろうと思いますが、そういう方向への展開というのもあるんだろうとは思っています。

お話を伺っていますと、結局、農家民宿があって、そこで例えばいろんな農家レストランみたいなものをつくっていく。だんだんその集積ができて、ネットワークの中で地域の方々同士で暮らしを支え合っていくというようなことができてきていると思わさせていただきました。これはいわゆる経済でお互い生きていくということもありますが、生き甲斐づくりであり、さらにもっと言えば、見守り活動なんかも通じて、いろんな地域の、例えば高齢者の方々を支えていくような仕組みにもなってるんじゃないのかなと思いました。

私としては、そういうふうに理解をして、そういう政策を展開をしていきたいと思っているところです。単に観光振興と単純に割り切っているつもりはありませんけど、そこのところ、よく気をつけないといけないところなのかなと思います。

Ｃさん：　私の地域でいいますと、私のところに泊まっていただいた方が、Ｉターンで２人住んでいただいているんです。その存在というのは山間地域のこの高齢化の中、この地域どうなるだろうという中で、非常に大きな力を発揮していて、そういう役割もこのグリーンツーリズムにはあるわけです。

お金を落とすだけじゃなくて、そういった人の資源まで呼び寄せることができる。そういった視点でもグリーンツーリズムは、私は地域を救う大きな取り組み

だなと思いますので、そういった視点で是非進めていただきたいなと思います。

Ｊさん：　四万十川の冬の魚はおいしいです。１月から３月中頃までの魚が一番。

今月２７日に、Ｊさんと長網で川の魚をとって、その場で揚げて食べさそうという企画を立てました。まだ第１回目ですので、反響はわかりませんが。冬のお客も呼んでほしい。冬の魚もおいしいということをアピールしたいと思います。

知事：　２月２７日、成功しますように、本当にお祈り申し上げます。

オフシーズン対策をやること。それも逆に言うと、伸びる余地があるところですよね。それぞれのイベントを考えて売っていくということは、重要だと思います。県全体だったら３月に「土佐のおきゃく」とかやったりするじゃないですか。あれなんかも３月がもともと少なかったのを少しでもお客さんを呼ぼうということで始めたイベントみたいですが、まさにそういう発想ですよね。

Ｋさん：　県のネットワークの会長をしており、もう何年も前から名前だけでしたが、今年お声がかかって参加しました。３年前にはメニュー作り、商品作りまでしたんですけど、それ以降ポシャッてしまいました。だから、自分たちがどうするかというのが一番大きなことだと思うんですけど、やはり、ネットワークとかを作った時に、作った後の支援とか、地域や行政とかの力がないと絶対にやっていけないというのを私は３年前に実感しています。

立ち上げるのは何でもしやすいんです。住民はいろんな考え方があっても、そこを引っ張って行く行政の協力がないと何もできないというのをすごく実感しています。

場所によっても、体験とか民宿とかによってもやはり考え方が違うと思うんです。どこがどういうふうにやっていきたいのかというところの相談の窓口というのが、実際に無いわけです。私たちも明日がわからない農家民宿ですので、その経営をしっかりしていきたい部分と、地域に元気をいただきたいという部分では、行政支援もものすごく必要だなと、つくづく感じております。県のネットワークをもし立ち上げていただけるのでしたら、真剣に取り組ませていただきますので、行政の支援もお願いしたいと思います。

知事：　行政は１回支援した、補助金出したらそれでしらんぷりということが非常に多かったりするということを言われますが、大事な視点であると思います。

今、地域アクションプランは、むしろ、補助金執行してからのほうが大事だという話で、アドバイザー制度とか、それから、外商公社によって売りこみの支援をし

たりとかいうかたちで、アフターケアを、大事にしようと言っています。

今おっしゃられた、いろんな方のご相談なんかをお受けするような窓口について、例えば、ネットワークが、まさにそういう役割を果たすということになるのか、もしくは何かアドバイザーみたいなことなのか、どうすればいいか少し政策を考えたいと思います。

Ｋさん：　県のネットワークを最初に作った時には、全部のところから集まって、メニュー作りをして観光の売り出しみたいなことをやったんです。ホームページ上でやったんですけど、それが結局何もならずに終わってしまって、それから何も無かったので、そういうネットワークを行政側から作ったとすれば、あと、どうするんですかということを聞きたかったんです。

今年またこういう農家民宿グループとか体験ツーリズムを作るとすれば、やはり、どういうふうなかたちで作っていくのか。県としては、グリーンツーリズムは、どういうかたちで進んでいってほしいのかとか、知事さんがどういうお考えで、そのツーリズムとかを支援していただけるのかなと。県のネットワークはまだあるんですが、やらなかったらやめたほうがいいと思うんです。

このあいだ話し合いがあって、四国のツーリズムの時には、４県がしっかりそういうのをやったほうがいいというのはありましたけど、でも、逆に中身がしっかりしてないと売りにもできないし、各市町村単位で、きちっとしたかたちとかがあればいいですが。

知事：　グリーンツーズムについての考えはさきほどお答えしたとおりです。確かに多面性があるんだというふうに私も思っています。それをどういうふうにこれから県としてバックアップしていくかということの知恵をいただきたいと思い、今日、お話をお伺いしておるところなんです。

ただ、おっしゃられたとおり、やはり、その多面性というところもよくよく意識していきながらも、小規模分散型であることや普通のご家庭を営んでおられた方が立ち上げられたことに対して、人的支援なんかどうしていくかなど、行政としてやっていかなければならない課題はあると、つくづく感じさせていただいております。

県のネットワークが、今、まわっていないという話、担当課と話してみます。どういう政策を練り上げていくか、少しお時間をください。

私は是非、グリーンツーリズムを通じて、地域地域において、ひとつまた生業というものが広く成り立っていくようにしてもらえればと思いますし、これを通じて、若い人達が暮らしていける、また、移住ということなどにもつながっていけるようになればいいと思います。もっと言えば、これが結果として社会福祉の向上につな

がっていくような仕組みづくりになっていけばいいと思います。そういう総合的な体系として考えさせてもらえればと思います。

Ｋさん：　大きな部分での観光振興は、本当に龍馬伝であり、呼び込む所は十分にあるわけですよ。ただ、本当に地域の集落集落が生きていくためのグリーンツーリズムというところに、少し着眼をしていただいたらなと思います。

一人ひとりの県民が、自分の力でちょっとずつやっていく、それの集合体がグリーンツーリズムだと思っています。地域を生かせる方法というのは、地域住民が一番知っています。それをいかに引き出していただくかが、例えば、地域支援企画員の方であったりとか行政の方であったりとかなのだと私は思います。

偉い人を呼んできて、本当の良いところはそういった方に習うのも、素晴らしいんですが、地域に入って一緒にしていただくことこそが指導というか、進む道だなと、どこの地域支援企画員の方を見ても密着してやっていただいて、そういうことが素晴らしいなと私は常日ごろ思っています。

地域の一人ひとりが生きていくための施策というのが、グリーンツーリズムだなと思いますので、そこらへんをもうちょっとよろしくお願いいたします。

Ｄさん：　行政の方に手を差し伸べていただくというのを待つというか頼りにするというのも、大変良いことでお願いをしたいんですけど、やはりそれだけでなく、自分たちだけで、やってくれなかったら次はどうしようかと次へ次へ勉強をしていく。ただ、行政だけに頼らないという姿勢をもつことも大事なことだと思います。都会の人は支援もなくて何もないのにいろんなことをやっていて、つぶれている店がたくさんあるわけですけど、田舎の者は、行政に頼って、それでだめだったからだめだというような、頼ってもやってくれなかったらだめだというのではなくて、やはり、自分でやれることはやると。高知県の何もかも行政に頼ってしまうという体質になっていてはいけないと、今改めて勉強して、私が感じていることです。

知事：　グリーンツーリズムの系統は、特に本日の連絡会の皆様はじめとして、民間のほうがものすごく進んでいて、いろいろ経験もされていて、それをさらにもっと伸ばしていく、もしくは他の地域に広げていくという話になる時に、やはりもう少しやらなければならないことがあるなと我々としても実感しているところです。

行政だけに頼らずということで言っていただいて､すごいことだと思いますけど、行政としてもツボをついたことができて、官民協働できるようになればいいかなと思います。

会長：　四万十川のネットワークで、例えば案内板を作る時に、小さな施設なので、１個１万円でもかなり悩み、地域づくりファンドに応募して半額助成いただいただけでも本当にありがたいなと思います。

なので、そういう実際お金の支援というところは、行政ばかりに頼らないで、自分達で、どこか財源がないかと思い、地域支援企画員の人達が、こんなのに応募したらと持って来ていただいたりして、今もトヨタ財団に応募しています。

このネットワークは５市町村にわたっていて、会があれば、場所によっては移動時間に２時間かかります。身近なところにあれば、すぐ相談ができて事務的なこともすぐできると思うんですが。そういう集まりなので、一番今、ありがたいなと思っているのは、地域支援企画員の人たちが流域に居て、その方たちのネットワークを通じて連絡網もしっかりできていること。それから、四万十川財団で、細やかに事務手続きを手伝ってくださっていること。これがなければ、なかなかこのネットワークも先へ進むのは、自分たちの力だけではとても難しいと思うんです。

具体的に、こういうことがしたいということがある時、例えば、この案内板作りたいのでどうしたらいいかという時に、実現するまで相談に乗っていただきました。

今一番お願いしたいことは何なのかと考えてみたところ、やはり地域支援企画員の方たちの活躍と、それから、（四万十川財団の）事務局がお手伝いしてくださっていることを是非このまま、あるいは、さらに強化して市町村の支援もいただきつつ、この流域の活性化につなげたいなと思っています。

このすみずみツーリズムは、今日の発表者の話を聞いて、それぞれの取り組みがあって、それが全て一次産業や四万十川の自然に根ざされたものであるということ、どれだけ大切な活動をされているのかが改めてよくわかったんですよね。

今日、発表されていない参加者の方も言っていただいたら、もっともっとそれがすごいことになるんだなと、知事にも四万十川の宝物を見ていただけたんじゃないかと思います。是非これを地産外商で売り出していくお手伝いもよろしくお願いしたいと思います。

５．閉会のあいさつ

皆さん、どうも長時間にわたりましてありがとうございました。いろんなことを教えていただきました。

まず第一に、本当にいろんなネットワークとしての効果を発揮しておられることを深く実感をさせていただきました。今日のお話をうけて、今後どう考えていくか、お時間もいただきながら、少し体系的な政策づくりを続けてさせていただきたいと思います。

いわゆる単なる賑わいづくりとかそういうものにとどまらない、最終的には地域地域に暮らしていけるということを大事にしていく、そのために何をしないといけないか。

それがゆえに、例えば産業化ということに一生懸命こだわっていく。若い人が残れるように、子育てができるような地域になるためにも、一定産業として生業ができていくようなことも非常に必要だということなんだろうと思うんです。

ただ、他方で、あわせて福祉の発達ということも必要だし、見守り機能というのも非常に必要になってくると思います。高知で暮らすというプロジェクトをやって、Ｉターン、Ｕターンとか、Ｊターンとか、そういう取り組みも進めたりもしているところですが、そういういろんなものごとに、グリーンツーリズムというのは、深く関わっているんだなということを感じさせていただきました。

今後、そのグリーンツーリズムの振興に向けて、皆さんからも大いにお知恵をいただきたいと思います。

本当に今日は、長時間にわたりましてありがとうございました。